



乙

子

だ
あ

種

有
如
良
毒
代
子

開
板
中
央
公
論
社



子 種

定価 200 円

昭和 33 年 11 月 25 日 初版発行

昭和 33 年 12 月 25 日 四版発行

著 者	有 賀 喜 代 子
発行者	栗 本 和 夫
印刷者	柳 川 太 郎
発行所	中 央 公 論 社

東京都中央区京橋 2 / 1 ・ 振替東京 34

<凸版印刷・色刷求竜堂・協和製本>

目次

子種

3

血

87

装釘 高橋忠弥

子 種

野づらはもう暮れていた。

しずえは、最後の一俵のばら炭を、うず高く枝薪束を積み上げた牛車の上に、呼吸をはかつて投げ上げると、車の輪に片足をかけてふんばり、荷綱をしっかりと締め上げた。

「えーい、このぐれえ、稼いで行きゃあ、おっかさんも今夜はちったあご機嫌いいずらな、な、牛んべえよ、おめえも一日中寒かつつらになあ、さあ、すべらねえように、歩いてくんろ。」

幼い頃から労働で鍛えた体は、小柄ながらがっしりと骨太い。血色のよい、浅黒い、目も鼻も丸い顔を、手拭ですっぱりと頬かむりをして、紺木綿の雪袴にゴム長靴を穿き、黒地の手織木綿の細かい縞の半纏の上から、山羊の毛皮をちゅんちゅんこのように着た姿は、薄暮の中では男女の区別も年齢の見当もつかない。しずえは長靴の甲に、すべり止めに荒縄をまきつけて、凍てついた山道を牛の鼻面に立って歩く。カタカタ、カタカタ、牛車の音は暮れなずむ八ヶ岳山麓の村有林に、ものがなしく響いていった。

「おっかささん、行つて参りました。」しずえは広い庭先きに牛車を挽き入れると、櫓火の燃えているのだつ広い台所に、頬かむりの手拭を取つて声をかけた。

「う」白髪頭を手拭に包んで、火の向う側に坐り、わたしで塩鱈を焼いていたおけんは鈍い、そのくせ底光りのする眼を、ちら、と上げただけで魚を裏返した。魚の内臓が火に落ちて、脂がじゅつと燃え上る。

夫の多作は火地炉の前に胡坐をかいていて、親子の前にはそれぞれ箱膳が据えてある。そして、大きなわたしに乗っている魚は二尾だけであつた。

しずえは、すぐ牛を車から放すと、台所の土間の右側にある厩舎に追い込み、藁を押切りで飼葉桶に刻み込むと、煮ておいた稗や豆殻を入れて、牛の鼻面に引きずつて行つた。

すぐ庭に出ると、積荷の片づけにかかる。ばら炭は台所の軒に積み、枝薪は家をひと廻りして、お蔵の後ろの廂の下に積み上げた。湿った夕闇の空気を縫って、庭にまで魚の焼けるにおいが流れて、しずえの鼻先きに漂う。しずえの腹が、く、くう、と切なく鳴つた。

しずえが荷下しをしている間に、湯気の立っている飯を、腹一杯つめ込んだ親子は、食い荒

したお膳はそのままに、すぐに風呂場へ立って行った。

タイル張りの湯槽ゆぶねの縁に腰をかけている多作の背中を、着物の袖を捲り上げ、雪袴たつづけを膝頭まで引き上げたおけんは、手拭を丸めてごしごしと擦ってやった。金魚の糞のような垢が、ポロポロ落ちる。湯をかけて流すと、今度は石鹼をつけて、首の後ろから、前の方まで丁寧に洗流す。おけんが力を入れて擦るので、多作の頸がうぐぐと鳴る。赤くなった俵の体を満足そうに眺めながら、

「いい体だなあ！ それでも！ 死んだ父っさの若え頃に、そっくりなあ——」と腰をのばしてしみじみと云うのに、多作はそれに応えもせず、後向きのまま、ズブリと湯につかった。おけんは湯槽ゆぶねの中で手を洗いながら、

「父っさがおめえの年齢としにゃあ、へえ、三人も子供あったぞ。おめえは駄目じゃねえかよお、ふんとに——」

多作はぶるんと顔を左手で撫でただけで、聞いているような様子も見えない。おけんは少し機嫌を損ねた。

「兄い、やい、耳は無えわだか？ 今夜はお日待ひまちでな、石鹼しゃばんを置いとくじゃねえぞ。出しとき

やあ、使われっちまうぞ。」

「——そんなこと云わねえたって——」しばらくして、多作がのろまな声を出した。

「——石鹼しゃばんぐれえ、てんでに持って来らあ——」

「そうでねえ。持ちちゃ来ても、おら家のを使う衆があるだ！」

「……」

「ほいからな、桶も出しとくなよ、湯を汲み出されるぞ！」

「……」

「な、いいか？ 分ったな？」

「——おっ母は入らねえだか？」

「おれは先刻さつきに入った。」おけんは戸口で足を拭きながら、振り返って、また、云った。

「え、兄い、分ったな、そいから湯を出る時にゃあ、風呂の蓋をしっかりとしめてから、出るだぞ。な、いいな。」

毎月の十六日と二十三日に、農業の神を祭り、講中が順番に風呂を立てて、お茶に招び合う

お日待講ひまちこうは、この地方のむかしからの素朴な行事の一つである。この頃は大方おおかたの農家に据風呂が普及したので、お日待の入浴を待ちかねる者も減ったが、むかしは風呂のある家も乏しかったし、ほかにこれと云った慰安もなかったから、このお日待講は、村人達の大きな楽しみの一つであった。当番の家では、風呂のある家から桶を借りて来て、当時の農家にとつては最上の奢りであるばた餅まで作って、宵から朝まで風呂に浸り、茶をすすった。ここで村人達は、素朴な言葉で哲学を語り、あけすけな仕種しぐさで聞きの秘密をあばき、誰れ彼れの噂うわさ話に花を咲かせて、朝陽の出るのを待ったという。

座敷の大きな炬燵こたつには、腕自慢のおけんが檻かご襖ふすまで織った、市松模様の炬燵掛けが掛けてあって、米と交換した広蓋ひろがたの赤漆が光っている。お茶の子には、大角豆ささげの塩煮に、それでも初霜ほどに白砂糖がかけてあった。去年の春摘はりんで来て塩漬しおづけけにして置いた山路やまぢきの煮付け、湿った紫蘇しそパンの天ぷら、午夢と人參のきんぴらがひと并ならずに、野沢菜のざわなの塩漬と、沢庵とが、二つの大井おおいにでんと盛り上げてある。瀬戸物の寸胴の箸立てには、安物やすものの丹塗にりの箸の、先きの方が二寸ほども剥むけたのが、二十箸ぐらい、ぐっと差し込んであって、茶渋でニスを塗ったように

見える茶のみ茶碗が十五六個、小皿も同じ数ほど添えてある。箸立てと並んで味の素の一キロ入りの大罐が、これ見よがしに飾ってあるのが、この田舎料理と奇妙な調和をなしていた。

おけんは、お日待箱の中から、馬頭観世音の掛軸を取り出して、押入れの前につけて、その前に据えたお日待箱の上に、蠟燭を灯し、線香を立てた。提燈の灯が、暗い木戸口に揺いで、近所の年寄り達がガヤガヤ集まって来た。「おつかれでござります。」おけんは台所の板の間に出て挨拶した。上の家の婆さんわでが一同を代表したかたちで仁義をのべる。

「おつかれでござります。今晚はお日待さまで、ご厄介さまでござります。」

「へえ、おみんなさま、おつかれでござります。よくおいでなして、お苦勞さまでござります。さあさ、あたっておくれ。風呂もあいてるだに、めた(遠慮せず)入っておくれ。」

「おお、ほうかい。この家の人しやうは入ったかや。」

「ああ、済んだわえ」

「ほんじゃあ、まあ、いただきます。」上の家の婆さんが、座敷にも上らず、すぐ風呂場の方へ行きかけると、おけんは、「それでも」と形ばかりに引き止めて、「まあ、お茶を一ぺえ上っしてからしておくれ」と云った。上の家の婆さんは、

「いんね、ま、お先きに風呂をもらうぞい。どうだい下の家の婆さ、おれと一緒に入らねえか？ この家の風呂場は眩くらしくて、おら一人じゃお恥ししいや。」「おお、ほうだ、ほうしず。」二人が連れ立って行こうとすると、

「やいやい、おれもお連れにしておくれ、おれを置いとく手はあるめえ。」東の家の婆さんが慌てた。「やいやい、おみんなさま一緒にかい？ そんなじゃまあ、そうしておくれ。」一度に入ってもらえば、燃料が大きにたすかる、それはおけんの思う壺であった。婆さん三人が、ひと騒ぎして行こうとすると、ひと足遅れて、孫のさと子連れて来た本家の老人が、

「おれも一緒に入らずか」ととぼけた顔をした。

「あーれ、まあ、いやだよ、本家の爺さ、いい年齢としをして、色気出すもんじゃねえよ。」

下の家の婆さんが、齒茎をむき出して笑う。

「そうゆうわけじゃねえ、でつけえ風呂だに入れるら？」

「いかにこの家の風呂がでつけえたって、五人も入りゃあ、湯がこぼれらあ。」上の家の婆さんへえも、げたげたと笑い崩れる。

「ちつとくらい、湯がこぼれたって、いいじゃあねえか。」本家の老人は台所に上りながら、

つけつけとした調子で、

「この家の嫁は、まだ山は雪だらけだというのに、へえ山に行ってるだぞ。ちつとは枝薪も焚かねえことには、下積みの方は湿氣で味噌になっちゃうじゃねえか、めた(たくさん)湯をこぼしてめた枝薪を焚くがいいや。」

「なあに、そんな馬鹿なことはしやしねえ。きのうも町の衆に五駄(三十把)ばか売ったわ。」
お日待箱の上に茶を供えながら、こちらへ背中を向けたままで、おけんが云った。

「ほう、また、枝薪でもうけたか？」老人は炬燵に尻を落ちつけ、孫を胡坐の間にはさんで、
「そうか、この家のことだで、またいい値に売つつら。」

「なあに、相場だあ。」

「ふん、相場か。枝薪の相場たあ一体いくらだ？」

「大したことはねえ——。ま、それよかお茶を一ぺえ上つとくれ。さと子には何をやらす？
この天ぶら食うか、それ、おご馳走だぞ。見ろ、な、菓子为天ぶらだぞ。旨えぞ。」

「なあに、お飯の食いたてだあ。何も要らねえ」と老人は、にべもない。

「だけんどこの家はいいなあ。嫁が稼ぎ者だで、多作が自動車に乗って遊んでいたっても困ら

ねえやな。」老人の皮肉におけんはむつとふくれて、目を据えた。

「多作は自動車で遊んでいはしねえ。助手つつうだわ。」

「ふん、助手かあ。助手つつうは、それを何年かやったら免状取れる衆のことだ。この家の多作は、いつ免状取れるだかい？」そう云って、老人はニヤリとした。

「そんなことは、今、わからねえ。」

「ほうれ見ろ、わかるめえ。多作の低脳頭^{へぼ}じゃあ、免状なんざ、一生かかっても取り得めい。」

「なあに、取らつとしりゃあ取れるけど、多作に取る気が無えだけのもんだ。」

「ふん。たとえ、多作が免状取る気になったとしても、お天陽様^{てんとう}明るいうちにゃあ、免状くれる方^{うち}でくれねいや。だで、おれが、多作は自動車と遊んでいるっちうだ。そんな埒^{うち}もねえことをさしかねえで、身にしてみて（真面目に）百姓させればいいものを、しずえがむげえ（かわいそう）じゃねえか。」

「なあに、赤坊^{こんぼ}産めねえ嫁^{あんな}なんざ、ちつとは他人^{ひと}よか余計に稼いでも、むげえなんてことはねえ。」おけんの鉄面皮^{てつぺん}な言種^{いぐさ}に、老人はすっかり腹を立てた。

「やいやい、おめえはしずえが嫁どのに來た頃にゃあ、『赤坊^{こんぼ}出来りゃあ稼げねえ。産んじやい

けねえ。孕んじゃならねえ』ちて、しょっちゅうはおすま酸漿の根を煎じてくれたっちうが、ありやあ
嘘か？」

「そりゃあおめえ、当座のことだわ。しずえはおめえ、もう七年にもなるだぞ。」

「七年が八年でも、しずえは温順おとなしい性質しやうだで、おめえがおっかなくて、孕めずにいるんだわ。」
「そんなことあねえわ。——そんなことはねえとも。」

「そうともさ。花だとして、木だとして、実を結ぶにゃあ時期があらあ。花の盛りをいじけち
まえば、こずえて実にもなるめいさ。」

「爺さ。おめえ吞んで来てるな。」

「吞んで来ようが、来めいがおれの勝手だ。てめえに貰った酒じゃねえ。なあ、おけん、人の
家は金運のいいよりは、人運の方が大事でえじだぞ。金は天下の廻り物だ、運せえ好ければ掴めるわ。
人はそうゆうわけにはいかねえ。嫁が幾年経っても孕めねえようじゃあ、こいつは大きに考え
ねばならねえ。」老人は注ぎ冷ましになっていた番茶を、ぐつとあおると、なおも、

「なあ、おけん。おら家じゃ、仲三人も戦争に取られて、帰とっさつて来たのは当主とっさが一人だ。それ
でもまあ、男っ子供五人もいたでおれも氣強えが——。それにしてもおら家は、戦死の公報あ